

大分県における近世墓地研究の軌跡と論点

— 最近二十年間の考古学的研究を中心に —

田中裕介

— はじめに — 近世墓地への関心 —

本稿の目的は、一九八〇年代以後の最近二十年間に大分県内でおこなわれた近世墓地調査の成果と、そこから提出された問題を提示することにある。近世墓地研究へのアプローチの方法は多様でありうるが、ここでは考古学的方法をもちいた研究を中心にまとめてみたい。以下まず研究史的背景をたどり、その後調査の経緯に即して、成果を三つのケースにわけて論じ、最後に近世墓地の現状についてふれる。

近世墓地、特に石製墓碑（ここでは以下墓石と表記する。）への関心はふるく、二〇世紀前半の民俗学における葬送墓制研究と中世石造物研究の勃興にともなうて研究の対象となってきた。しかしその関心は、民俗学の場合は葬送埋葬習俗研究の中の一項目にとどまり、石造物研究の場合は板碑宝塔などその後「石造美術品」と呼ばれるようになる中世の優品が中心であり、墓石への関心も美術的なものやその銘文に限られる傾向があった。そのなかで一九三〇年代にまとめられた坪井良平の『山城木津惣墓墓標の研究』⁽¹⁾は、千基を越える墓石を悉皆調査して形式分類し、代表的な墓石の実測調査を行って、その年代的推移と形式内容を明らかにした。墓石そのものに考古学的な調査手法を適用した先駆的な研究であった。

一九五〇年代から七〇年代にかけては、民俗学の分野では、葬送墓制研究の深まりと共に墓石への関心が高まり、そのご竹田聴洲の仏教民俗学研究・土井卓治の「石塔」研究・小林大二の差別戒名研究などへ発展した。⁽²⁾ 石造物研究では戦後近世の庚申塔研究が進められ、その中で近世の墓碑への一定の関心が持続した。その背景には近世においては同一の石塔を庚申塔と墓石に使い分けるといふ石製品の共用という事情があったからである。⁽³⁾ しかし考古学研究からの関心は長い間、縄文弥生古墳時代を中心とする先史考古学にかたより、歴史考古学の対象は寺院や仏教遺物・中世陶器の研究へ集中していった。そのため坪井良平の研究は五十年近く孤立した業績となっていたのである。

その間一九六〇年代のアメリカ合衆国では、ディーツによる植民地時代のイギリス系移民の石製墓標研究がおこなわれている。そこでは墓石を単なる考古学研究的素材として扱うではなく、その研究成果をもとに、アメリカの植民地時代と独立以後の歴史研究に寄与する固有の研究分野としての歴史考古学を模索していた。⁽⁴⁾ この研究の背景には、西欧地域での歴史考古学の著しい発展があった。二〇世紀後半の欧米考古学では一六世紀以後の遺物研究が進展し、陶器、クレイパイプなどの編年と遺物目録が一九六〇年代には確立し、アメリカ植民地にもたらされたヨーロッパの近世陶器を調べることで、アメリカの歴史時代遺跡の年代決定を可能にしていた。

いっぽう日本の考古学が再び近世に目を向けるようになるのは一九七〇年代からであり、ふたたび近世墓地がその研究対象となるのは一九八〇年代からである。近世墓地の研究では早稲田大学の谷川章雄の一連の業績⁽⁵⁾によって、われわれは坪井良平が開いた地平を乗り越えようとする研究に接したと言える。

註

(1) 坪井良平『山城木津惣墓標の研究』一九三二、私家版(『考古学』一〇一六、一九三九、東京考古学会に発表、のち『歴史考古学の研究』一九八四、ビジネス教育出版社に収録。)

(2) 竹田聰洲『民俗仏教と祖先崇拜』一九七二、東京大学出版会

土井卓治『石塔の民俗』一九七二、岩崎美術社

小林大二『差別戒名の歴史』(雄山閣ブックス21)一九八七、雄山閣出版

(3) 一九五〇～六〇年代に東京都周辺で多くの在地の研究者が庚申塔や野仏の研究を開始する動機が多くが、東京都を中心とした戦後の高度成長に伴う開発がまず首都近郊ではじまり、そのさい多くの近世石造物が見捨てられて失われていく状況をまのあたりにしたことにある点は、今日の地方の近世墓地研究の状況を先取りしていた。

(4) James Deetz "In Small Things Forgotten" 1977 (Anchor Books) Anchor Press

(5) 谷川章雄「近世墓塔の形態分類と編年について」『文学研究科紀要 別冊10集哲学史学編』一九八三、早稲田大学大学院文学研究科

谷川章雄「近世墓標の類型」『考古学ジャーナル』二八八、一九八八、ニューサイエンス社

谷川章雄「近世墓標の変遷と家意識」『史観』一二一、一九八九

等の墓石研究にはじまるその後の一連の研究。

二 大分県の近世墓地研究略史

以上のような学史的環境の中で、大分県内の近世墓地研究も始まった。以下その経過を一九八〇年代と九〇年代に分けて略述する。文末の第1表と第2表は、大分県内の近世墓地調査例と、関係文献を網羅したものである。第1表は大分県内の管見の限りでの近世墓および近世墓地の調査例を年代順に並べたもので、第2表も調査報告・研究論文を、簡報もふくめて網羅し年代順に並べたものである。以下調査番号は第1表、文献番号は第2表を参照。

二一、一九八〇年代の調査と研究

大分県ではまず大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館による中世荘園総合調査の一環として、近世墓、特に墓石と墓地の

造墓過程に注目した調査が一九八〇年代初めにはじまった。最初におこなわれた田染^{たしよ}荘の近世墓地調査は、平板測量による墓地の平面配置図の作製と、各墓石の形式分類をおこない、銘文を調査カード化し、分類された形式の典型例を実測調査したもので、その手法は従来の石造美術品研究の最先端をいくものであった(調査1~4—以下第1表の調査番号とする)。その後このような墓地調査は都甲^{とよあ}荘・香々^{かか}地^ち荘などの国東半島の中世荘園調査に受け継がれていくとともに、県内の研究者にも影響を与え、萌芽的な近世墓地の墓石調査がおこなわれた(調査8・10)。

一方そのころから埋蔵文化財の緊急調査が増加し、調査遺跡のなかで近世墓地の遺構が発見されることが多くなった。近世考古学が注目されていなかった一九七〇年代までは、それらの遺構は「後世の攪乱」として無視されていたが、八〇年代からは近世考古学の全国的な勃興に影響されて、近世墓地も考古学的手法で調査記録されるようになる。大分県では一九八三年のガラヌノ遺跡(調査5)を始まりとし、以後調査例が増加する(調査7・9・14)。その背景には近世陶磁器研究の進展、特に近世に全国的に普及した肥前陶磁器の分類編年研究が大橋康二氏をトップに急速に進展し、また出土銭貨とくに近世墓出土の六道銭の研究が鈴木公雄氏を中心に進展したため、墓石の失われた墓であっても、出土遺物から年代決定が可能になったという背景があつた。⁽⁶⁾

しかし近世墓地の現状調査に主眼をおく前者が近世墓の上部構造である墓石を対象にし、遺構としての墓に注目する後者が、墓石の失われた下部構造としての墓坑とその内容を対象にするという、調査上資料上の乖離が存在した。そのような状況のなかで一九八六年に緊急調査の対象となった大分市女狐^{めはこ}近世墓地の調査(調査6)は、近現代の改変がほとんどないという保存状態のよい希有な例という偶然が重なって、墓石と墓坑さらに墓地の施設が全体として調査された。その方法は石造物と墓石の悉皆実測調査、下部構造と出土遺物の考古学的な発掘調査と記録であり、その特徴は①同一形式の墓石もすべて実測調査をおこなったこと。②銘文が書かれた墓石の穂のみでなく、台石などもすべて実測の対象としたこと。③墓地全体の平板測量調査をおこない、石造物と墓石などの向き・位置関係を詳細に記録したこと。④墓石と墓坑の対応関係を明らかにしたこと。など

であり、特に墓石と墓坑の対応関係が明確な墓の調査は、墓石銘文によって墓坑資料に正確な実年代を与え、その年代をもとに造墓過程を詳細に追跡することを可能にした。

二一2、一九九〇年代の調査と研究

一九九〇年代に入ると、以上のような三つのケースの調査が数多く行われるようになる。

第一の近世墓地の墓石調査は、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館とその後身である大分県立歴史博物館の荘園調査（文献11・17）にうけつがれ、関連する中世寺院跡の調査（調査17・18・24）や、六郷山寺院遺構確認調査（調査19・21・22・31）36・38）41・47）52・60）63・82）に伴う近世寺院の墓地調査が、連年おこなわれるようになった。さらに大田村の波多方地区の調査（調査29）では、明治二〇年頃の地籍図作製時につくられた一村の墓石銘文記録と現存する近世墓を悉皆調査して、双方を対比する研究がおこなわれた。ほかに大分市歴史資料館（調査77）、県教委・市町村教委による調査もおこなわれるようになった（調査28・30・70・71・75・80）。

第二の埋蔵文化財緊急調査時に発見される近世墓坑の調査は、引き続き県内各地で行われて（調査7・9・14・15・23・27・37・43）46・53・55・57・58・64）67、72・74・78・81）、資料の蓄積がすすみつつある段階である。早桶・方形棺・甕棺・蔵骨器・火葬遺構などの埋葬施設と、六道銭・陶磁器・土師質土器をはじめとする副葬品の内容が判明し、両者がどのように関係するかという出土状況の資料化がすすみ、さらに埋葬人骨そのものの調査もおこなわれている。

第三の近世墓地の全体調査は、桐ヶ迫遺跡（調査11）・峯添遺跡（調査12）・広瀬遺跡（調査16）をはじめ、数多く行われるようになった（調査20・26・42・56・59・69・73）。その成果は次節で述べるとして問題なのは、このような調査は、墓地が現地から移転を余儀なくされるような事情が生じた場合にのみおこなわれるものであるから、現状では学術調査として行われることなく、埋蔵文化財の緊急調査として行われる場合がほとんどであるということである。いわば近世墓地調査のかなりの部分を

行政調査がささえるという事態になっている。一九九八年に、文化庁は埋蔵文化財の調査対象遺跡を原則として中世までとし、近世遺跡は地域において必要なもの、近現代遺跡は地域において重要なものを対象とする報告をまとめた。その報告の主旨は近世の以後の遺跡を切り捨てるのではなく、緊急調査を実施する地方公共団体に調査の必要性の説明責任と重要性の判断を求めたものであった。⁽⁷⁾しかしまだ研究の深まりと広まりの弱い近世墓地研究は、大分県においてはその必要性和重要性が認められているとは必ずしもいえない。とはいえ、最近の『図説江戸考古学研究事典』(二〇〇一、柏書房)の刊行にみられるように、近世墓地を含む江戸時代の考古学研究は、近世史研究に新たな一分野を加えた。今後とも、その重要性は増すことはあっても、減ることはないと考えられる。近世墓地の全体調査は、最も豊かな資料のひとつである。

註

(6) 肥前陶磁器の研究については大橋康二氏による九州陶磁資料館の一連の図録に結実している。ほかに、

大橋康二『有田町史』古窯編、一九八八、有田町

大橋康二『肥前陶磁』(考古学ライブラリー55)一九八九、ニューサイエンス社

出土六道銭については、

鈴木公雄『出土銭貨の研究』一九九九、東京大学出版会、に結実する一九九〇年代の一連の研究。

(7) 文化庁文化財保護部記念物課「埋蔵文化財の把握から開発事前の発掘調査に至るまでの取扱いについて(報告)」『月刊文化財』平成一九九八年七月号、一九九八、第一法規出版

この報告は文化庁が設置した埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会の第三次報告である。そのなか全国各地の地方公共団体がおこなっている緊急調査の対象遺跡の时期的範囲のばらつきをふまえて(第一章(1)埋蔵文化財の範囲の拡大と地方公共団体における取扱い)、埋蔵文化財として扱う範囲の原則に触れている。(二)埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲。

この報告の主旨は、一九九八年九月に、文化庁次長から、各道府県教育長あて、通知されている。

三 近世墓地研究の成果

ここでは以上の研究史に基づき、この二十年間の研究のなかで提出された主要な論点を簡単に触れていきたい。以下第2表の文献番号を付記する。

三―1、墓石調査から

渡辺文雄・山田拓伸の研究(文献1・4・5)にはじまり、小柳和宏(文献11・17)・原田昭一(文献44・61・68)の引き継がれたもので、中世から近世・近現代へと継続する墓地の変遷を、特定の墓地の墓石悉皆調査に基づいて究明する、いわば近世墓のマクロ的視点からの研究である。板碑形・位牌形・方柱形(報告では冑形)という成人墓の各墓石形式の変遷、僧侶の墓としての無逢塔形式、幼児の墓としての仏像浮彫形式の墓石の存在などを、県内の資料で確認したのである。なかでも墓石の位置と銘文から判明する年齢性別などから近世家族の系譜の復元をおこなった山田拓伸の研究(文献5)は、近世墓地資料が、飯沼賢司氏の説く系譜史料としても一級のものであることを示した。⁸⁾

一七世紀前半の墓石の空白 中世墓地の性格を近世墓地との対比の上で探ろうという観点からなされた小柳・原田の研究から、中世墓と近世墓とは墓地としては継続するが墓石の上では断絶があることが報告され、それにともなつて一七世紀初頭から中葉の墓石が極めて少ないことが指摘された上、その空白を埋める墓石形式の究明が行われた。すでに畿内とその周辺地域では一六世紀から一八世紀まで墓石が間断なく存在しその形式の交代が明瞭におえるのに対して、当時の日本の中枢以外の九州から東北までの周縁諸地域ではこのような空白が、共通する現象として存在することは知られていたが、大分県でもその空白が確認された。小柳は国東宇佐地域についてその間を埋める墓石形式として、自然石墓標をおき(文献17)、原田は地域によっては中世板碑の系譜を引く板碑形墓石が存在することを指摘した(文献68)。

しかしなにより重要なことは、その墓石空白の時期においても、墓地が営まれたことは確實であるにもかかわらず、墓石がほとんどたてられなかった、という重要な事実の認識なのである。一六世紀末までは墓石としての五輪塔・宝塔・板碑が多数存在し、一七世紀後半以後には近世墓石の建立が盛行していくという時代の挟間で、半世紀以上にわたって墓石が非常に少ない点である。この時期、畿内とその周辺では墓石の樹立が継続しておこなわれているのに、なぜ大分県をはじめとする国内周縁地域ではすでにふれたように近世墓地における墓石造立が低調なのかという近世初期の墓制の重要な問題点に連なっていく。

この空白の問題については、次のような観点からの検討が必要であろう。ひとつは石工すなわち石造技術者の動向の問題である。一五九〇年代から一六一六年(元和二)の一国一城令までは全国各地の大名によって、石垣を多用した近世城郭と城下町の建設が各地でおこなわれており、一六一六年以後も一六三〇年代までは、大阪・京・江戸の三都を筆頭とする天下普請が、全国の譜代・外様大名を動員したお手伝普請としておこなわれており、大分県内に領地をもった大名も例外ではなかった。当然以上の建設には、それまで五輪塔などの石造物・墓石を製作してきた石造技術者が動員されたものと考えられる。とすれば在地に残って墓石を供給する石工がきわめて少なくなる、という事態をもたらした可能性が高い。しかしなお、天下普請がおこなわれた一六三〇年代までと板碑形墓石が復活する一六六〇年代との間にさうとうな時間差があるので、この石工の不在を墓石空白の主な原因とみなすにはなお躊躇するが、一七世紀前半の石工の全国的な動向を検討することはさけておれないであらう。

もうひとつの観点はキリシタン墓地の問題である。豊後は戦国末期の一時にキリスト教布教の中心に位置し、一六一〇年代のキリシタン弾圧の本格化以後も、一六六〇〜八〇年代の「豊後崩れ」と呼ばれる転びあるいは残存キリシタンの最終的な弾圧までの半世紀間、集落・家族単位で相当数のキリシタンが各地に潜伏していたことが判明しており、彼らの墓制がいかなるものであったかは、非キリシタンの墓制とどのように関わっていたかという問題まで含めて注目される。いまのところ県内のキリシタン墓で年代の判明しているものは一六一〇年代までであるが、キリシタンの最終的な弾圧が幕府によって意図的に

こなわれた一六六〇年代に、仏教色の強い板碑形墓石が近世墓として復活することの背景を考えると、近世墓がキリシタン墓に対する思想的アンチテーゼという側面をもっていたことが考えられる。一六六〇年代に全国的に確立される寺檀制度も、それを推進した幕府の政策的出発点がキリシタン撲滅と、キリシタンの転びすなわち仏教諸宗派への改宗の強制であったことを思えば、空白の時期を経ての近世墓石の建立の盛行と普及には、一七世紀の幕府によるキリシタン政策が深く影を落としていると推定される。その意味でキリシタン墓制の追求は、近世墓石の一七世紀前半の空白の意味を解明するための重要な観点になると考えられる。

墓石形式交代の画期 近世の墓石が一七世紀後半と一八世紀後半に形式の交代を伴う画期があることが指摘された(文献1・

4・7)。一七世紀後半の板碑形墓石の出現、一八世紀前半に位牌形墓石へと漸次交代する事実である。この墓石形式の交代自体は古くから指摘されていたが、この墓石形式の交代の背景にある近世墓地の形成過程をどう評価するかをめぐって、原田は近世寺檀制度の確立した一六六〇年代に墓石造立が復活する点を重視して、一七世紀後半の板碑形墓石を中心とする近世墓地の形成を画期として重視する。しかし一八世紀前半の位牌形墓石の普及には、それまで不統一であった「禅定門・禅定尼」「信士・信男・信女」「居士・太姉」などの戒名脚字の使い方が全国的に統一され、同時に位牌祭祀が普及することが指摘されており、墓石造立階層がなお村落の有力者に限られている板碑形墓石の時期をもって、近世墓地における最も重要な画期と見なすことにはなお問題が残る。墓石造立階層という点からみれば、中世末の戦国期の板碑・五輪塔墓石を建てた人々と、一七世紀後半に板碑形墓石を建てた人々は、村落内の有力者層という点で一致しており、一八世紀前半、特に享保期に爆発的に増加する位牌形墓石の造立が、墓石造立階層の範囲の拡大すなわち村落内の一般農民身分への下方拡大を伴っていたと考えられ、墓石造立階層の変化という点では、一八世紀前半は画期的である。同時に、戒名に「童子・童女」を刻む早世幼児墓石の造立が一八世紀前半以後に激増するという、子どもの埋葬を重視する傾向がこの時期に顕著になる背景には、家の継統を願うがゆえに子孫繁栄を喜び、それゆえ早世した幼児を悲しむという家意識がその時期急速に拡大した可能性が高く、それが墓

制に反映されるという結果をうんだために、幼児墓としての墓石が普及すると考えられる。早世乳児埋葬の変化は、家意識の普及にともなう「近世的子供観」の成立を意味する画期となる。以上から一八世紀前半の位牌形墓石への交替とその普及という画期は、今後さらに様々な側面から検討する必要がある。

さらに特定の近世村落の全墓石を悉皆調査して、墓石が急激に増加する時期が一七世紀後半と一八世紀前半の二度の画期だけでなく、一九世紀はじめにも存在し、その背景に人口増とさらなる墓石建立階層の拡大を示唆した後藤一重の研究がある(文献29)。この一九世紀はじめの画期には、他の地域の調査では墓石形式の位牌形から方柱形への変化が伴うようであり、同時に墓地形成については、この時期から一墓地内の造墓がランダムになる傾向が指摘されている(文献39・60)、重要な近世墓地の転換点である。

以上のように墓石を造立する近世墓地には一七世紀後半・一八世紀前半・一九世紀初頭の三つの画期があり、画期にはさまれた各時期の近世墓地の内容を、さらに具体的に様々な観点から検討しなければなるまい。

このほか注目される論点としては、村落の耕地・屋敷・集落と近世墓地の関係を整理し、集落の墓地が近世になって分散する場合と、共同墓地化する場合の背景に、中世から近世にかけての耕地開発と集落形成の差をみようとした後藤の研究(文献29)があり、類似の観点からの報告もある(文献17・28)。

三―2、墓坑と出土遺物調査から

埋葬施設の問題 一九八三年のガラヌノ遺跡の調査当時からすでに火葬造骨器の存在が知られていた(文献2・3)が、その

後女狐近世墓地のように木製の早桶と方形棺が存在し、僧侶の墓には甕棺が使われる場合(文献39)や、なかお中尾近世墓地のように早桶から方形棺へ年代的な交代をする墓地が存在することが明らかになっている(文献60)。いっぽう埋葬施設がすべて火葬墓

で構成される広瀬遺跡が報告されている(文献20)。さらに中世以来の伝統的な寝棺の残存する真玉町向畑近世墓地(文献21)など、埋葬施設については、地域・階層・身分・中世以来の伝統の強弱などで、隣村の墓地同士を比較しても、違いがあるという状況である。このように埋葬施設は斉一的に変化するものではないことが判明しつつあり、墓石形式が比較的斉一に、板碑形・位牌形・方柱形へと変化していく傾向とは対称的である。ここからなぜ埋葬施設と墓石の変化の様相が異なるのかという問題が提起される。この点は近世の墓石が墓地において常に可視的な存在であり、新たに墓を作るとき身分の異なる隣人の墓石、自らの祖先などの墓石といったすでに墓地に存在する古い墓石を、常に意識して新しい墓石を選択するという、可視的な構造物特有な事情が背景にあると考えられる^(註)。いっぽう墓坑と埋葬施設は葬式という一回性の儀礼にもなうものであり、他者の視線も墓石にくらべれば狭い範囲に限られ、ほかの葬送習俗の中に埋没しやすい。要するに墓石は造立後、時を越えて他者から比較参照される可視的なものであるから、造立者は不特定多数の周囲の人や後世の人を意識して、墓石を選択する。他方埋葬施設は葬式に参加する範囲の限られた人々を意識して選択されるから、墓石と異なる地域性や伝統を持つようになる^(註)と推測される。今後の重要課題である。

副葬品の問題 どのような遺物が副葬され、時期を追って、その内容と組み合わせがどのように変化するかという考古学的関心からの整理が各調査報告でおこなわれているが、副葬された近世陶磁器の編年研究の進展から、副葬品の存在する墓坑の埋葬年代に限っては、おおよそ半世紀単位で推定することが可能となったものの、墓石が判明しない場合や、副葬品のない墓や、副葬品の種類が限られる墓については年代決定が不能に近い。しかし次節で述べる対応する墓石が残ったおかげで、その銘文から埋葬年月日・被葬者の年齢・性別が特定できた副葬品の場合は、その情報を基礎にして副葬品は多くの問題を提起してくれる。

三一三、墓地の全体調査から

大分県内での二十年間の間に墓石と埋葬施設つまり上部構造と下部構造が調査されたのは女狐(文献39)・桐ヶ迫(文献19)・峯添II区(文献19)・広瀬(文献20)・向畑(文献21)・上野(文献67)・中尾(文献60)・小野家(文献65)などである。その調査と報告の中から考古学的なテーマに絞ってその成果の一端と紹介しよう。

墓石の型式変遷の問題 近世の墓石がおおつきみに板碑形・位牌形・方柱形へと変遷することは、先に触れた先行研究から明らかであるが、板碑形・位牌形などの形式の墓石がさらに多くの型式に細分されることが、悉皆実測調査の結果明らかになった。女狐近世墓地の報告(文献39)のなかで各墓石形式の型式分類がおこなわれ、さらに中尾近世墓地の調査報告(文献60)では位牌形墓石の詳細な型式分類と変遷がしめされた。一見するとあまりに単純、あるいはあまりに個性的にみえる墓石のひとつひとつにも、縦断面形態や蓮華座の文様などに时期的な変遷の特徴がうかがわれることが証明されたのである。このような型式変遷の研究はなお一墓地あるいは小地域内の墓地群を対象としたものにとどまっており、どの程度の普遍性すなわち地域性をもつのかという研究が欠如しているため、県内のすべての墓石に適用可能かどうかはこれからの研究課題である。しかし近世墓石の諸形式が、さらに細分可能な型式群に分類整理され編年の指標になりうることを示されたことは重大である。なぜならそこに刻まれた没年を見ることなしに、墓石の特徴を観察することで、墓石の年代を半世紀あるいは4半世紀単位で判定できるようになり、没銘が古い年代であっても墓石の新しいさを根拠をもって主張できるようになったからである。

墓石はいつ立てられたか 以上の墓石の型式学的研究の成果は、埋葬から墓石樹立までの間の時間差の問題を提起した。従来遺物としての墓石の製造年代はそこに記された没年月日銘文をもとに、葬式直後・一周忌・三回忌・七回忌・十三回忌などに建てられたという各地の民俗調査例を参考にして、おおむね死後十年前後の時期に建てられたと仮定した上で、製作年代を推定するものであった。墓石のデータを大量に利用するセリエーション分析などの統計的な研究の場合には、この十年差さえ捨象される。資料操作の方法としては間違ではないし、大多數の墓石が埋葬後十年前後で建てられることも統計的には正し

い。しかし墓石の型式研究は、型式的に新しいにもかかわらず、刻まれた没年が十年をはるかに越える後年の墓石建立例があることを明らかにした。たとえば女狐近世墓地(文献39)では、61号墓の一六五三(承応二)年と一六五六(明暦二)年の没年を刻む墓石は、型式変遷からみた場合一八〇〇〜一八一〇年頃に製作されたと考えられるものであり、どうように62号墓の一六八〇(延宝八)年と一六八六(貞享三)年の没年を刻む墓石は、一七四〇年代製作の墓石であった。79号墓も一七〇八(宝永五)年没銘だが、一七四〇年代製作の墓石である。以上は相当な開きがあるので、わかりやすい例であるが、二十年ないし三十年ほどのちの一世代あとにたてられる例は数多くあり、中尾近世墓地(文献60)でもA-13号墓は一七六一(宝暦二)年の没銘をもつが、一七九〇年代頃の製作と筆者はかんがえるし、A-14・15号墓は同一型式・同規格の花崗岩製墓石を持ち同一時に建てられたと考えられる墓石であるが、A-14号墓は一六七九(延宝七)年没銘、A-15号墓は一六九六(元禄九)年没銘で、墓石にかまされた六道銭の組み合わせから一八世紀初頭にたてられたことは明らかであるから、A-14号墓は没後二十年以上へて墓石が建てられていることになる。このように墓石の型式的研究は、墓石造立年代を特定して実際の埋葬年代との差を明らかにし、埋葬後どれぐらの年代をへて墓石が建てられるかという問題に、解答を与えうる研究方法であることを示した。

さらに墓石が後世建て直される例を検出している。実は百年前後の年代差を指摘した女狐近世墓地の61・62号墓は、当初おそらく死後十年前後で一度墓石が建てられていて、それを後に銘文を写して墓石が建て直されているのである。そして当初の墓石はあたらしい墓石の下に埋められていた。このような建て直しの事例は、大名墓でも認められる。たとえば大分県佐伯市の毛利家の墓地では初代藩主の墓石型式が、幕末期の藩主の墓石と同一であり、このことは一九世紀になって初代藩主の墓石が新たに製作・建て直されたことをしめしている。実際毛利家墓地には、初代藩主の墓の一部と伝わる石殿が残っている。このようにある一部の墓については、子孫によって特定の先祖の墓石を建て直すということがおこなわれているのである。つまり墓石は二度建てられることがあるのである。

以上のように墓石の型式的研究は、死者の埋葬年代と墓石の造立年代が必ずしも一致しないことを明らかにし、その年代

差を確定することを可能にした。さらに数十年あるいは百年を越す年代差がある場合には墓石の建て直しという行為がおこなわれていることも明らかにされた。これは型式学という考古学の研究方法の有効性を示すものである。と同時に、近世墓地における墓石の造立という行為が、死者の子の世代によっておこなわれるのみでなく、孫の世代あるいは曾孫に世代によってもおこなわれる場合があることを教えてくれたのである。

墓の階層性　すでに古くから僧侶身分の墓は無逢塔形式、早世幼児の墓石は仏像浮彫形式であることが知られていた。そのような身分差・年齢差による墓石形式の使い分けだけでなく、同型式・同規格の墓石を用いた墓でありながら、六道銭の数が夫が六枚で妻が二枚というように、夫婦における男女差があることが中尾近世墓地で報告され、この傾向は女狐近世墓地の一八世紀後半の墓群でも認められる。女狐では夫婦の墓とみられる墓石を比較すると、六道銭の数だけでなく、同一型式でも夫の墓石にくらべて妻の墓石が一回り小さいといった規格の男女差がみとめられる。このような差違は夫婦の中の男女差として認められるだけでなく、世帯間の差としても認められ、その歴史的変遷を追うことで、同一時期における世帯間の格差とその変化、家系毎の違いが墓石に表現されることが明らかになる。

以上のように銘文によって埋葬年代と性別・年齢を特定できる墓の調査によって、埋葬時の副葬品に現れる格差と、墓石建立時における墓石に現れる格差の比較対照することが可能となった。そのなかから当時の男女観、家の微妙な違いの感覚、子供観、身分観などの身分階層構造と、そこから派生する様々な観念をうかがうことができ、その歴史的変遷と、そこで明らかとなる墓地の改変すなわち変容の実態を追求することを可能にした。この方法は近世墓地を読み解くための基礎となると考えられる。

墓地の移動の問題　近世においても転居、移住があつたことはいまでもないが、その際墓がどうなったかという問題が、提起されている。大田村の波多方地区(文献29)では、同一家系の墓地が一八世紀後半に墓域を移動させることが明らかにされており、その場合墓石移動や改葬はないとみられる。これは同一村落内の近接集落への移転の例である。近接している別の村

に移転し新たに集落を開いた大分市女狐近世墓地の場合は、以前の墓地から埋葬を集骨改葬し、墓石を移転して新たな墓地に建立した例を確認している(文献39)。一方幕末期に南海部郡からの移住が確認できる大分市机帳張四集落の墓地は、集落の開設と共に造墓がはじまっており、移住前の墓地からの墓石の移動はない。このように移転の事情の相違や移動距離の遠近によっては、墓を改葬するのみならず、墓石の移設をおこなう場合があることが判明し、現存する近世墓石が近現代の移転以外に、その当時においても移動する場合があることが判明した。

墓石の産地の問題 大分県内の墓石の石材をみると、大多数は在地の石材である燧灰岩や安山岩を用いているが、一七世紀後半から一八世紀前半の板碑形墓石と位牌形墓石には、大分県内に産しない花崗岩製の例が沿岸部の墓地を中心に数多く認められる。石材の花崗岩は瀬戸内産と推定されるが、その流通形態にはひとつの問題が存在する。花崗岩墓石には戒名や命日などの銘文が葉研彫りで正確に刻まれており、墓石を製作する際にすでに産地あるいは石材加工業者に、戒名等の死者の情報が伝えられていたことをこの刻字の存在はしめしている。花崗岩墓石は遠隔地からの搬入品であるから、産地に情報を取り次ぎ注文を受ける仲介業者が豊後沿岸部の諸都市に居住していたか、あるいは産地から加工された墓石を豊後に輸入し注文を受けて銘文を刻む石材加工業者が豊後にいたか、のいずれかと推定されるが、いずれにしても近世墓石が普及しはじめた当初の豊後には、瀬戸内産の花崗岩製品を扱う業者が居住し、遠隔地間の墓石を取次ぐシステムをもっていったことは間違いない。また板碑形墓石の中には花崗岩製の型式要素を模倣した燧灰岩製の墓石が散見されるので、墓石のスタイルの伝播にともなって以上の墓石取次のノウハウも、在地の石材業者につたえられたと推定される。この墓石の商取引の実態は、異なる石材でつくられた墓石の型式の影響関係を明らかにすることで、考古学的に一定の解決を得ることができるのではないかと考えられる。

この一七世紀後半から一八世紀前半の花崗岩製墓石の流通システムがいかなる歴史的起源を有するかという問題が提出されたわけであるが、この問題については中世石造品の流通システムとの対比が、今後の課題である。ちなみに福井県で製作された日引石塔が、一四世紀から一五世紀前半に五島列島から青森十三湊までの日本海沿岸各地に大量搬出されたことが判明して

いる。そのうち五島列島に搬出された五例の紀年銘について、文字の陰刻の彫り出しの仕方は大変につたなく素人の手によるものと観察され、搬入後五島現地で彫り出されたものと推定されている。⁽¹⁴⁾つまり日引石塔は製作地の福井県では字を刻まず石塔のみが搬出され、紀年銘を必要とするときは搬出先で刻まれたということである。日引石塔にみられる一四から一五世紀の石造物流通システムは、先の近世花崗岩墓石の流通システムと比べると、製品の注文取次という商業的側面において格段の相違があると考えられる。今はまだ対比できる資料が限られているので、なお議論を深めなければならないが、墓石の流通システムの解明は、文献史学や民俗学的研究のみならず、物質資料としての墓石をあつかう考古学からも迫れるものと考えられる。

副葬品の問題 近世墓地の全体調査は墓坑内の棺・副葬品に正確な年代をあたえた。副葬品については使用された年代の正確な一点つまり副葬年代をあきらかにした。たとえば副葬された土師質土器の編年に正確な実年代資料をもたらず(文献39・60)。また製作年代のわかる遺物では伝世の問題が提起される。たとえば女狐68号墓は墓石型式から一七四〇年代の埋葬と推定されるが、副葬品に一六三〇年代までに製作が終了した肥前産陶器の溝縁皿があり、日用品においても百年以上の伝来が認められた。


また六道銭の使用状況がかなり明確になり、六道銭を副葬しない墓がかなり多数にのぼること。六枚完全セットは特定の男性に副葬され、女性・子どもは1枚ないし2枚であることから、被葬者の村落内での社会的地位や男女・年齢による差があることが明らかとなった。

註

(8) 飯沼賢司「系譜史料論」『岩波講座日本歴史』別巻3、一九九五 岩波書店

(9) 村井早苗『幕藩制成立とキリシタン禁制』一九八七 文献出版

(10) なお、ここで墓石の「形式」、「型式」についての筆者の考えを延べておきたい。板石形、位牌形、方柱形などの「形」は「形式」の省

略形で、この形式は、墓石の最も重要な形態的特徴である墓石上端の形すなわち、の共通性によつて定義され、その発生、盛行、衰退には、百年あるいはそれ以上の時間の経過とその数量的変化をたどることができる。考古学的には、セリエーション分析に最適の分類法である。したがって、その墓石形式は年代と地域を必ずしも特定しない。

これに対して、墓石型式という時の「型式」は、板碑形式の墓石の形態を、上部形態以外の様々な形態要素をもとに、細分したもので、たとえば板碑形の1型式-2型式-3型式…と、並べることが証明された場合の、個々の型式である。結果として、各墓石形式は多数の細分型式の時間的地域的集合となり、その合理的な変化の方向を確定することによって、各型式は、たとえば一七八〇〜九〇年代の大分地域の墓石というように、細かい年代と地域を特定することが可能となる。

(11) 土井卓二註(2)文献

(12) 小林大二註(2)文献

(13) 墓石が墓地においては世代を越えて可視的な存在である、という指摘は、上角智稀氏による。

(14) 大石一久「日引石塔に関する一考察」『日引』一、二〇〇一、石造物研究会

四 おわりに — 失われる近世墓地 —

この二十年の近世墓地の研究成果を、筆者の関心に即してまとめてきたが、触れられなかった問題も多い。特に竹田岡城周辺の武家近世墓地や、近世大分県の小藩分立のために各地に存在する大名の墓地の問題。豊前から宇佐・国東で判明しつつある山伏の墓制や、墓石の下に認められる積石施設の問題等は、筆者にはいまのところ手に負えないので触れられなかった。しかしそれでもなお近世墓地の調査は、三節のような多くの問題を提起し、考古学研究の手法を用いた資料化によって、相当の成果が期待できる分野であることを示し得たのではないかと思う。墓制研究という考古学研究が伝統的に得意としてきたアプローチを、近世墓地に適用するとき、どのような成果が生まれるのか、近世墓地の考古学研究は、考古学のフロンティアのひとつである。

さて、最後に近世墓地の現状についてふれておきたい。ところで近世墓地の調査に対して抵抗を覚える原因は大きく二つに分かれる。ひとつは「近世墓なんてどこにでもたくさん残っている。わざわざ発掘調査しなくてもよい」という意見と、現在でも子孫が守っているいわば他人の先祖の墓をあばく抵抗感である。

前者の意見は近世の墓石と近世墓地を混同した間違いである。たしかに現在の墓地には近世の銘文を刻む墓石が多数いや膨大に残されている。これは事実である。しかしその大半は近現代の累代墓建立や墓地の移転などで墓石のみが遊離したもので、近世に建てられたまま現代の改変を受けていない墓地は極めて少ない。この点について以下に山村と都市の例を挙げてみよう。

女狐(近世墓地の所在する大分市机張原地区は、中世以来の集落「新村」集落と一八世紀始めに開拓された「女狐」集落、幕末の新田開発で移住したきた「机張原」四集落と「菅田原」一集落からなるが、一八八九(明治二二)年の地籍図作成段階では、それぞれの集落に対応する七ヶ所の墓地が確認できるが、一九八六(昭和六一)年の女狐近世墓地調査段階で、同じ位置に墓地が継続していたのは四ヶ所であった。ほかの三ヶ所は移転したり畑地あるいは山林になっていた。残った四ヶ所の中で近現代の累代墓建設で墓内が改変を受けていたもの三ヶ所(そのうち一ヶ所は道路拡幅で後に移転)、唯一ほとんど改変を受けず近世墓地の景観を保存していたのは女狐墓地だけで、それでも広場の一部は道路拡幅で削られていた。その女狐墓地も道路建設のため緊急調査をおこなって移転したのである。したがって一八八九年段階において累代墓が普及する以前の近世墓地景観を残していた七ヶ所の墓地は、その後の開発により約百年間で消滅したのである。たしかに今でも机張原地区の共同墓地をたずねれば、当初の位置から離れた近世の墓石を数多く目にする事ができる。しかし近世の村落景観の一部として近世墓地の面影を残す墓地はすでない。

以上が比較的近現代の開発がすくなかった山村の例である。近現代の開発が多い都市部ではどうか。ここでは大分市鶴崎地区を例に取る。鶴崎は近世熊本藩領の飛び地二万石を統治した場所、藩主の参勤交代のため逗留するお茶屋とよばれる方形館を中心に、近世初頭に加藤氏によって建設され、細川氏によって整備された都市である。熊本藩の水軍施設を中心とした

町割りが施され、港町・軍港として栄えた。都市内の墓地はすべて七つの寺院に集められ、それ以外の寺司浜に一ヶ所共同墓地が設けられていた。このうち一九三〇年代の河川改修で寺司浜墓地と龍興寺墓地のすべてと法心寺墓地の一部の三ヶ所の墓地が移転・整理され、一九七〇年代の区画整理でさらに福正寺・興福寺・大音寺・神護寺の四ヶ所の墓地が移転あるいは整理された。その間各墓地では累代墓の建設が進行していたため、今日近世的な墓地の雰囲気をとどめるのは、わずかに法心寺墓地の一部区画のみである。

このように山村と都市部での近世墓地の状態を考えれば、そのほかの墓においても良好な状態の近世墓地は極めて少ないことが推測できよう。現在まだ時折見かける保存状態のよい墓地や、一部に一定のまとまりを持って近世墓石が残されている墓地については、考古学の対象という観点のみからではなく、民俗資料・石造美術品としての側面をも重視すれば、歴史資料として重要なことはいうまでもない。ひいては文化財としての保護対象としなければ、それらは、早晚消滅するとかんがえる。遊離した墓石や、墓石を失った墓坑資料でさえ、貴重な歴史資料となることが、先述のような、考古学研究によって判明しつつある。ましてや残された数少ない近世墓地においておやである。

近世墓地が急速に失われる事情のひとつに、墓地が今日でも子孫による祭祀の対象であり、自己の家の墓を鄭重に扱うがゆえに、墓地を整理し新しい墓に建て替えるという事態がある。つまり近世墓地の多くは、なお祭祀するもののない遺跡と化してはいないのである。このような近世墓地のおかれた特殊な事情からみて、その研究と保護にあたっては現在の祭祀継承者である子孫の方々のプライバシーに対する十分な配慮と、近世墓地の歴史資料としての重要性の説明が必要である。学術調査・行政調査をとわずわれわれ研究者の社会的責任としてその説明責任が求められるであろう。今後は研究成果の公表のあり方を含めた調査研究のためのガイドラインの議論が深められなければならないことを言い添えて稿をとじたい。

終わりに今回のまとめにあたり、竹田市の近世墓地調査例を十分に組み込めなかった点をお断りしておきたい。また本稿作製にあたっては、多くの方々の業績を参考にしたが、特に原田昭一・吉田寛・綿貫俊一・小林昭彦・大津祐二との意見交換に負うところが大きい。記して感謝したい。

(二〇〇一、二、一八 大分市南鶴崎二一八一四)

墓数	墓石配置図	墓石銘	墓石類	墓石測	墓坑調査	文献
97	○	○	○	△	×	渡辺文雄1983
約400	○	○	○	△	×	山田拓伸1986, 山田拓伸1987
約50	×	○	○	×	×	山田拓伸1986
約350	×	○	○	×	×	山田拓伸1986
7	—	—	—	—	○	栗焼憲児1984-8
120	○	○	○	○	○	田中裕介1987, 1996
6	—	—	—	—	○	小柳和宏1995
約20	○	○	○	△	×	二宮昭二1990A・1990B
4	—	—	—	—	○	玉永光洋1990
4	○	○	○	○	×	田中裕介1995
3	○	○	○	○	○	小林昭彦1991, 小林昭彦編1994
29	○	○	○	○	○	小林昭彦1991, 小林昭彦編1994
5	×	○	○	×	×	林一也1995
16	○	○	○	×	○	林一也編1991, 林一也1995
3	—	—	—	—	○	坂本嘉弘1999
30	○	○	○	○	○	原田昭一1991, 1994
10	○	○	○	○	△2	小柳編1992
12	×	—	○	△5	×	渡辺文雄1992
14	○	○	×	×	×	栗田勝弘1993
56	○	○	○	○	○	城戸誠1994
約80	○	○	×	×	×	栗田勝弘1994A
約10	×	○	×	×	×	栗田勝弘1994B
7	×	×	×	×	○	中野ほか1994, 中野ほか1997
109	○	○	○	×	×	中須賀真美1994
9	—	—	—	—	○	
64	○	○	○	○	○	下村精一1994
2	—	—	—	—	○	池邊千太郎1995
13	○	○	○	○	×	村上久和・衛藤麻衣1996
約600	×	○	○	×	×	後藤一重1995
21	○	○	○	○	×	植田由美1995
18	○	○	×	×	×	栗田勝弘1995A
35	×	○	×	×	×	櫻井成昭1995
13	×	○	×	×	×	櫻井成昭1995
25	○	○	×	×	×	栗田勝弘1995B
16	○	○	×	×	×	栗田勝弘1995C
約20	×	○	×	×	×	栗田勝弘1995D
1	—	—	—	—	○	坪根伸也1996
120	○	○	○	×	×	原田昭一1996・1997
14	○	○	×	×	×	原田昭一1996
440	○	○	○	×	×	原田昭一1999
15	○	○	○	×	×	原田昭一1999

第1表 大分県近世墓地調査年表

番号	近世墓名	所在地	調査年	調査担当者
1	空木渡辺・河野家墓地	豊後高田市	1982	宇佐歴民
2	熊野墓地	豊後高田市	1983	宇佐歴民
3	蔭庄屋墓地	豊後高田市	1983	宇佐歴民
4	大門旧墓地	豊後高田市	1983	宇佐歴民
5	ガラマノ遺跡	中津市	1983,12~1984,2	栗焼憲児
6	女狐近世墓地	大分市	1986,5~8	田中裕介
7	小迫墳墓群第Ⅳ地区近世墓	日田市	1987,9~12	小柳和宏
8	柞原八幡宮宮師家墓地	大分市	1987,11	二宮昭二ほか
9	豊後国分寺中門地区近世墓	大分市	1989,5~7	玉永光洋
10	後藤家墓地	日田市	1990,5	田中裕介
11	桐ヶ迫遺跡近世墓地	宇佐市	1990	小林昭彦
12	峯添遺跡Ⅱ区近世墓地	宇佐市	1990	小林昭彦
13	切寄地区虚空蔵寺古墳	宇佐市	1990	江藤和幸・林一也
14	虚空蔵寺Ⅲ区近世墓地	宇佐市	1990・1992	江藤和幸・林一也
15	千人塚遺跡	大野郡緒方町	1990	坂本嘉弘・高野弘之
16	広瀬遺跡東区近世墓地	宇佐郡	1990,5~8	原田昭一
17	智恩寺堂山地区墓地	豊後高田市	1991	小柳和宏
18	智恩寺院主墓所	豊後高田市	1991	渡辺文雄
19	津波戸山旧海蔵寺跡	速見郡山香町	1992	栗田勝弘
20	茶屋の辻近世墓地群	竹田市	1993,5~9	城戸誠・原田昭一
21	大岩屋墓地群	西国東郡真玉町	1993	栗田勝弘
22	横城山	杵築市	1993	栗田勝弘
23	下野遺跡	大野郡犬飼町	1993	中野宏一・原田昭一
24	正平寺座主墓地	下毛郡耶馬溪町	1993	宇佐歴民
25	上居屋敷遺跡	宇佐市	1993	小倉ほか
26	向畑近世墓地	西国東郡真玉町	1994,1~3	下村精一
27	横尾遺跡群32・37次	大分市	1994,6~7	池邊千太郎
28	北村家墓地	大野郡朝地町	1994,11~1995,1	衛藤麻衣・村上久和
29	波多方地区近世墓地群	西国東郡大田村	1994	後藤一重・濱田教靖
30	成恒遺跡近世墓群	下毛郡三光村	1994	植田由美
31	西方寺歴代住職墓地	西国東郡国見町	1994	栗田勝弘
32	靈仙寺墓地	西国東郡香々地町	1994	櫻井成昭
33	実相院墓地	西国東郡香々地町	1994	櫻井成昭
34	文殊仙寺歴代住職墓地	東国東郡国東町	1994	栗田勝弘
35	神宮寺歴代住職墓地	東国東郡国東町	1994	栗田勝弘
36	小城寺歴代住職墓地	東国東郡国東町	1994	栗田勝弘
37	下郡遺跡群63次・66次・67次	大分市	1995,7~9	坪根伸也
38	綾部家・報恩寺墓地	東国東郡武蔵町	1995	原田昭一
39	丸小野寺墓地	東国東郡武蔵町	1995	原田昭一
40	上平入会墓地	西国東郡香々地町	1995	原田昭一
41	中山家墓地	西国東郡真玉町	1995	原田昭一

墓数	墓石配置図	墓石銘文	墓石分類	墓石実測	墓坑調査	文献
40	○	○	○	○	○	下村精一1996
12	○	—	—	—	○	吉田寛1997
57	—	—	—	—	○	行時志郎1998
2	—	—	—	—	○	池邊千太郎1997B
約20	—	—	—	—	○	
11	○	○	×	×	×	原田昭一編1997
約30	○	○	×	×	×	原田昭一編1997
約50	○	○	×	×	×	原田昭一編1997
						原田昭一編1997
2	×	○	○	×	×	原田昭一編1997
3	×	○	○	×	×	原田昭一編1997
2	—	—	—	—	○	池邊千太郎1997A
12	—	—	—	—	○	池邊千太郎1997C
10	○	○	○	○	○	河野典之ほか2000
3	—				○	池邊千太郎1997D
22	△	△	○	△	○	田中裕介2000
80	○	○	○	○	○	吉田寛1999-3
約50	○	○	×	×	×	原田昭一・堀優子1998A
11	×	○	○	×	×	原田昭一1998
約50	×	○	○	×	×	原田昭一1998
18	○	○	○	×	×	原田昭一・堀優子1998B
17	—	—	△	△	○	礫浦幸徳2000
1	—	—	—	—	○	高島豊1998
1	—	—	—	—	○	坪根・中西1998A
4	—	—	—	—	○	坪根・中西1998B
約170	○	○	○	×	×	城戸誠・上野淳也1998, 城戸誠2000
90	○	○	○	○	○	綿貫俊一2000
15	○	○	○	○	×	綿貫俊一2000
2	○	○	○	○	×	綿貫俊一2000
8	—	—	—	—	○	河野史郎1998
2	○	○	○	○	○	土居和幸2001
2	—	—	—	—	○	
96	○	×	×	×	○	宮田剛1999, 豊田徹士2000
157	○	○	○	○	×	
約170	○	○	○	×	×	大分市歴史資料館1999
4	—	—	—	—	○	
94	×	○	○	×	×	吉武牧子2001
36	×	×	×	×	○	城戸誠2000
22	○	○	○	×	×	宮内克己2001

番号	近 世 墓 名	所 在 地	調 査 年	調 査 担 当 者
42	大村D地区近世墓地	西国東郡香々地町	1995	下村精一
43	久原第2遺跡	大分市	1995,12~1996,1	吉田寛
44	祇園原遺跡近世墓群	日田市	1996,3~10	行時志郎
45	横尾遺跡群49次	大分市	1996,4~8	池邊千太郎
46	野村台遺跡	臼杵市	1996,5~6	神田高士
47	両子寺松平家内室墓地	東国東郡安岐町	1996	原田昭一
48	両子寺墓地	東国東郡安岐町	1996	原田昭一
49	護聖山裏山墓地	東国東郡安岐町	1996	原田昭一
50	胎蔵寺墓地	豊後高田市	1996	原田昭一
51	道脇寺墓地	豊後高田市	1996	原田昭一
52	道脇寺墓地阿部氏墓地	豊後高田市	1996	原田昭一
53	横尾遺跡群48次	大分市	1996,8	池邊千太郎
54	芝原近世墓地	竹田市	1996,8~9	城戸誠
55	横尾遺跡群52次	大分市	1996,10~12	池邊千太郎
56	上野遺跡近世墓地	豊後高田市	1996,11~1997,2	大久保謙一郎
57	横尾遺跡群53次	大分市	1996,12~1997,3	池邊千太郎
58	茨川原近世墓地	大分市	1997,7~8	田中裕介
59	中尾近世墓地	大分市	1997,1~2,1998,1~3	吉田寛
60	慈恩寺歴代住職墓地	豊後高田市	1997	原田昭一・堀優子
61	万福寺墓地	東国東郡国見町	1997	原田昭一・堀優子
62	万福寺寺族墓地	東国東郡国見町	1997	原田昭一・堀優子
63	成仏寺歴代住職墓地	東国東郡国東町	1997	原田昭一・堀優子
64	花立遺跡近世墓地	直入郡久住町	1997,4~6	磯浦幸徳
65	一木遺跡炭床地区	大分市	1997,5~6	高島豊
66	下郡遺跡群95次	大分市	1997,8~10	坪根伸也・中西尚武
67	下郡遺跡群96次	大分市	1997,8~10	坪根伸也・中西尚武
68	稲荷谷近世墓地群	竹田市	1997,8~1998,3	城戸誠・上野淳也
69	小野家墓地	速見郡山香町	1997,12~1998,3	綿貫俊一
70	小野家墓地第2地点	速見郡山香町	1997,12~1998,3	綿貫俊一
71	神取家墓地-古墓	速見郡山香町	1997,12~1998,3	綿貫俊一
72	下郡遺跡群103次	大分市	1998,1~3	河野史郎
73	祇園原遺跡2次	日田市	1998	土居和幸
74	八坂中遺跡	杵築市	1998	後藤一重
75	五郎丸近世墓地群	大野郡千歳村	1998,5~9	宮田剛
76	川野遺跡	臼杵市	1999,1~3	小林昭彦
77	壇の下共同墓地	大分市	1999,5~7	中西尚武
78	田井ヶ迫遺跡	臼杵市	1999	槇島隆二
79	和泉第1遺跡	速見郡日出町	1999,7~8	山本恭弘・松本康弘
80	荻山近世墓地群	佐伯市	2000	吉武牧子
81	久戸谷近世墓地群	竹田市	2000,2~3	城戸誠
82	浄土寺住職墓地	東国東郡国東町	2000	宮内克己

第2表 大分県近世墓地調査研究文献一覧

番号	編著者	発行年	題名	掲載誌	発行機関
1	渡辺文雄	1983-3	「墓地と墓標」	『豊後国田染荘(国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査概報)』	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
2	栗焼憲児	1984-8	『ガラヌノ遺跡』	中津市文化財調査報告3	中津市教委
3	村上久和	1984-8	「ガラヌノ遺跡近世墓の被葬者について」	『ガラヌノ遺跡』	中津市教委
4	山田拓伸	1986-3	「近世の墓地と墓碑」	『豊後国田染荘の調査』I (宇佐歴史報告3)	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
5	山田拓伸	1987-3	「近世の墓地と墓碑」	『豊後国田染荘の調査』II (宇佐歴史報告6)	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
6	田中裕介	1987-3	「机張原女狐近世墓地」	『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報』	大分県教委
7	田中裕介	1990-3	「大分県の近世墓碑」	『大分県地方史』137	大分県地方史研究会
8	二宮昭二A	1990-3	「杵原八幡宮「宮師家の墓地」調査概要」	『大分市歴史資料館ニュース』9・10	大分市歴史資料館
9	二宮昭二B	1990-5	「杵原八幡宮師家墓地と諸院坊」	『二豊の石造美術』11	大分県石造美術研究会
10	玉永光洋	1990-12	「豊後国分寺」	『大分市埋蔵文化財調査年報』1	大分市教育委員会
11	小柳和宏	1991-3	「墓地からみた家の動き—私田の場合—」	『豊後国都甲荘』4(国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査概報)	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
12	原田昭一	1991-3	「広瀬遺跡」	一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報III	大分県教委
13	小林昭彦編	1991-3	『笠松・桐ヶ迫・峯添遺跡』	一般国道10号宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報IV	大分県教委
14	林一也編	1991-3	『虚空蔵寺遺跡切寄遺跡』	一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報	宇佐市教委
15	小柳和宏編	1992-3	『智恩寺』	宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告9	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
16	渡辺文雄	1992-3	「智恩寺の仏像と石造物」	『智恩寺』(宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告9)	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
17	小柳和宏	1993-3	「墓地の類型と変遷—中世を中心として—」	『豊後国都甲荘の調査』本編(宇佐歴史報告11)	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
18	栗田勝弘	1993-3	「津波戸石屋(津波戸山水月寺)」	『六郷山寺院遺構確認調査報告書』I (宇佐歴史報告12)	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
19	小林昭彦編	1994-3	『桐ヶ迫遺跡 峯添遺跡』	一般国道10号宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告2	大分県教委
20	原田昭一	1994-3	「広瀬遺跡」	『宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』II	大分県教委
21	下村精一	1994-3	『真玉地区遺跡群発掘調査概報』1	—	真玉町教委
22	城戸誠	1994, 3	『岡藩城下町遺跡群竹田地区南部遺跡群V』	—	竹田市教委
23	中野宏一・原田昭一・吉田寛	1994-3	『下野遺跡』	国道10号線大飼バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査概報(1)	大飼町教委
24	中須賀真美	1994-3	「座主墓地」	『檜原山正平寺』(宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告14)	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

番号	編著者	発行年	題名	掲載誌	発行機関
25	栗田勝弘A	1994-3	「大岩屋(大岩屋山應 曆寺)」	『六郷山寺院遺構確認調査報告書』 II(宇佐歴史報告13)	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
26	栗田勝弘B	1994-3	「横城山(横城山東光 寺)」	『六郷山寺院遺構確認調査報告書』 II(宇佐歴史報告13)	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
27	小柳和宏編	1995-3	『小泊墳墓群』	九州横断自動車道関係埋蔵文化財 発掘調査報告書3	大分県教委
28	田中裕介	1995-3	「後藤家墓地」	『日田市高瀬遺跡群の調査』1	大分県教委
29	後藤一重	1995-3	「波多方の石造品と近 世墓地」	『豊後岡田原別符の調査III波多 方の歴史』(大田村文化財調査報告 書3)	大田村教育委員会
30	真野和夫	1995-3	「霊仙寺旧墓地の調査」	『豊後国香々地荘』2(国東半島荘 園村落遺跡詳細分布調査概報)	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
31	植田由美	1995-3	『三光地区遺跡群発掘 調査概報』IV	-	三光村教委
32	林一也	1995-3	「虚空蔵寺遺跡III区 (近世墓)」	『一般国道宇佐別府道路建設に伴 う埋蔵文化財発掘調査報告書』	宇佐市教育委員会
33	櫻井成昭	1995-3	「夷石屋(夷山清霊仙 寺)」	『六郷山寺院遺構確認調査報告書』 III(宇佐歴史報告15)	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
34	栗田勝弘A	1995-3	「文殊仙寺(蛾眉山文 殊仙寺)」	『六郷山寺院遺構確認調査報告書』 III(宇佐歴史報告15)	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
35	栗田勝弘B	1995-3	「大嶽山(大嶽山神宮 寺)」	『六郷山寺院遺構確認調査報告書』 III(宇佐歴史報告15)	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
36	栗田勝弘C	1995-3	「小城寺(小城山寶命 寺)」	『六郷山寺院遺構確認調査報告書』 III(宇佐歴史報告15)	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
37	池邊千太郎	1995-12	「横尾遺跡群32・37次 調査」	『大分市埋蔵文化財年報』6 1994年度	大分市教委
38	原田昭一	1996-3	『六郷山寺院遺構確認 調査報告書』IV	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗 資料館報告17	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
39	田中裕介	1996-3	「女狐近世墓地」	『九州横断自動車道関係埋蔵文化 財発掘調査報告書』5	大分県教委
40	村上久和・ 衛藤麻衣	1996-3	『町墳墓群』	大分県朝地地区遺跡群発掘調査報 告書III	朝地町教育委員会
41	下村精一	1996-3	『真玉地区遺跡群発掘 調査概報』3	-	真玉町教委
42	坪根伸也	1996-12	「下部遺跡群第63次・ 66次・67次調査」	『大分市埋蔵文化財年報』7 1995年度	大分市教委
43	原田昭一編	1997-3	『六郷山寺院遺構確認 調査報告書』V	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗 資料館報告19	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
44	原田昭一	1997-3	「豊後国における「配石墓」 終焉の一様相-大分県武蔵町 藤部氏・報恩寺墓地を通じて」	『大分県立宇佐風土記の丘歴史民 俗資料館研究紀要』10	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
45	吉田寛	1997-3	「横塚第2遺跡・久原第 2遺跡」	大在土地区画整理事業に伴う埋蔵 文化財発掘調査報告書	大分県教委
46	中野宏一・ 原田昭一	1997-3	『下野遺跡 上津尾遺 跡』	国道10号線犬飼バイパスに伴う埋 蔵文化財発掘調査報告書	犬飼町教委
47	池邊千太郎 A	1997-12	「横尾遺跡群48次調査」	『大分市埋蔵文化財年報』8 1996年度	大分市教委
48	池邊千太郎 B	1997-12	「横尾遺跡群49次調査」	『大分市埋蔵文化財年報』8 1996年度	大分市教委
49	池邊千太郎 C	1997-12	「横尾遺跡群52次調査」	『大分市埋蔵文化財年報』8 1996年度	大分市教委

番号	編著者	発行年	題名	掲載誌	発行機関
50	池邊千太郎 D	1997-12	「横尾遺跡群53次調査」	『大分市埋蔵文化財年報』8 1996年度	大分市教委
51	原田昭一・ 猫腰子A	1998-3	「稻嶺山慈恩寺」	『六郷山寺院遺構確認調査報告書』 VI(佐佐歴史報告20)	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
52	原田昭一A	1998-3	「万福寺」	『六郷山寺院遺構確認調査報告書』 VI(佐佐歴史報告20)	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
53	原田昭一B	1998-3	「龍下山成仏寺」	『六郷山寺院遺構確認調査報告書』 VI(佐佐歴史報告20)	大分県立宇佐風土記 の丘歴史民俗資料館
54	城戸 誠・ 上野淳也	1998-3	『中川午之助屋敷群跡 荷谷近世墓地群』	一般国道502号線改良工事埋蔵文化 財発掘調査概報III	竹田市教委
55	行時志郎	1998-3	「祇園原遺跡」	『平成8年度日田市埋蔵文化財年 報』	日田市教委
56	坪根伸也・ 中西尚武A	1998-12	「下部遺跡群第95次調 査」	『大分市埋蔵文化財年報』9 1997年度	大分市教委
57	坪根伸也・ 中西尚武B	1998-12	「下部遺跡群第96次調 査」	『大分市埋蔵文化財年報』9 1997年度	大分市教委
58	河野史郎	1998-12	「下部遺跡群第103次 調査」	『大分市埋蔵文化財年報』9 1997年度	大分市教委
59	高島豊	1998-12	「一木遺跡(炭床地区・ 経蔵地区)」	『大分市埋蔵文化財年報』9 1997年度	大分市教委
60	吉田寛	1999-3	『中尾近世墓地』	国道10号線日野原交差点拡幅に伴 う埋蔵文化財発掘調査報告書	大分県教委
61	原田昭一	1999-3	「香々地域地域の墓制一 長小野集落の近世墓地 の検討を遺して」	『豊後国香々地荘の調査』本編 (大分県立歴史博物館報告1)	大分県立歴史博物館
62	宮田剛	1999-3	『五郎丸遺跡』	千歳地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ	千歳村教委
63	坂本嘉弘	1999-3	『千人塚遺跡』	緒方町総合運動公園建設に伴う埋 蔵文化財発掘調査報告書	緒方町教委
64	大分市歴史 資料館	1999-7	「壇ノ下共同墓地」	『大分市歴史資料館ニュース』47	大分市歴史資料館
65	綿貫俊一	2000-3	『小野家墓地発掘調査 報告書』	大分県文化財調査報告書111	大分県教委
66	田中裕介	2000-3	「茨川原近世墓地」	『玉沢地区糸里跡』 (大分県文化財調査報告書105)	大分県教委
67	河野典之・ 岩男真吾・ 水田裕久	2000-3	『真中地区遺跡発掘調 査報告書』	豊後高田市文化財調査報告6	豊後高田市教委
68	原田昭一編	2000-3	『千坂西遺跡』	大分県文化財調査報告書108	大分県教委
69	篠浦幸徳	2000-3	『市第Ⅳ遺跡・ドグワ 遺跡・花立遺跡』	—	久住町教委
70	城戸誠	2000-3	「久戸谷近世墓地群」	『一般国道502号改良工事埋蔵文化 財発掘調査概報Ⅳ』	竹田市教委
71	城戸誠	2000-10	「稻荷谷近世墓地群の 調査成果と特徴」	『考古学ジャーナル』464	ニューサイエンス社
72	豊田徹士	2000-11	『五郎丸近世墓地群』	千歳村所在遺跡群発掘調査報告Ⅵ	千歳村教委
73	土居和幸	2001-3	「祇園原遺跡2次」	日田市埋蔵文化財調査報告書28	日田市教委
74	吉武牧子	2001-3	『萩山遺跡群』	萩山地区区画整理事業に伴う埋蔵 文化財発掘調査報告書	佐伯市教委
75	宮内克己	2001-3	「浄土寺」	『六郷山寺院遺構確認調査報告書』 IX(大分県歴史博物館報告5)	大分県立歴史博物館